

多民族国家マレーシア

士別市立士別南小学校教諭 石黒 雄治

マレーシア在歴について

(派遣期間) 2000年4月～2003年3月

(勤務先) 在マレーシア日本国大使館付属・クアラルンプール日本人学校

はじめに

「スラム・パギ」(おはよう)で始まるさわやかな一日のスタート。

マレーシアの基本情報

1. マレーシアの国土は、シンガポールと海を挟んで、二つに分かれています。



国名	マレーシア Malaysia	【2002.5月現在】
首都	クアラルンプール	
面積	33万338平方キロメートル(日本は約37万7800平方キロメートル)	
人口	約2300万人(日本は約1億2500人)	
国民	マレー系(65.1%)、中国系(約26.0%)、インド系(約7.7%)その他(1.2%)	
時差	日本時間マイナス1時間	
気候	1年を通じて高温多湿。熱帯性の気候に属して、モンスーンの影響で雨期と乾期があるが、内陸のクアラルンプールは、比較的安定している。	
言語	マレー語(国語)、中国語、タミール語、英語は都市部を中心に日常的に使われている。	
宗教	イスラム教、仏教、儒教、ヒンドゥー教、キリスト教、原住民信仰	

マレーシアの歴史(繰り返し続いた侵略から独立へ)

マラッカ王国の誕生

7世紀頃....歴史にマレー半島が登場と言われる。

14世紀....マラッカ王国成立

他国支配が続いた時代

ポルトガル オランダ 英国 日本 再び英国の支配下に。

マレーシアの独立

1957年 マラヤ連邦独立

1963年 マレーシア成立(シンガポール、サバ、サラワクを加える)

1965年 シンガポールが分離、独立

先進国入りを目指して発展するマレーシア

2020年の先進国入りを目指して、発展している。(ビジョン2020の計画)

スズ、ゴムなどの1次産業が経済を支えてきたが、近年では、観光業、ハイテク部門

の成長が見られる。

政治について

1 政治体制

基本政体：立憲君主制。13 州（マレー半島部の 11 州、北ボルネオのサバ州、サラワク州）と連邦直轄区（クアラ・ルンプール、ラブアン、プトラジャヤ）よりなる。

元 首：サイド・シラジュディン第 12 代国王（2001 年 12 月就任、任期 5 年。ペリス州ラジャ（他州のスルタンに相当）58 歳。スルタン会議において互選。）

首 相：アブドラ首相（第 5 代首相）

議 会：二院制（上院 下院）

2 国民の支持が高かったマハティール前首相

「ビジョン 2020」の発表

1991 年 2 月、マハティール前首相は、2020 年までにマレーシアを先進工業国にするための経済社会開発 構想である「ビジョン 2020」を発表した。国家の統合を究極の目的とし、貧困の撲滅及び社会の再編成を目標 とする。

スズとゴムを、産出する未開発の地域だった同国を、ハイテク製品の 輸出国で、東南アジア諸国連合（A S E A N）で最も発展した国の一つに変容させたカリスマ指導者の引退は、同国にとって大きな節目となる。また、東南アジアの「顔」として外交的にも存在感のあるリーダーが表舞台を去ることで、A S E A N に新時代の到来となる。

「東方政策」(LOOKEASTPOLICY)

マハティール前首相は 1981 年 11 月に「東方政策」を提唱し、両国の友好・協力関係のシンボルとなっている。

マハティール前首相は人作り政策を重視しており、特にマレーシア人の労働倫理の変革を通じた潜在能力の開発を図るために打ち出されたものが「東方政策」である。

日本（及び韓国）の発展の経験や労働倫理等を学ぶための具体的な事業として、留学生及び研修員を派遣している。日本は、これまで留学生約 2,800 名、研修員約 3,300 名の受け入れに協力している。

ブミプトラ政策

マレーシアは多民族国家である。

（人種構成比：マレー系 62.8%、中国系 26.3%、インド系 7.5%、その他 3.5%）

1969 年に人種暴動を経験し（同年総選挙の直後、マレー系と中国系の対立から人種暴動「5.13 事件」が発生）、各人種間の融和を図りつつ、非マレー系に比して相対的に貧困なマレー系の経済的地位を向上させる政策をとっている。

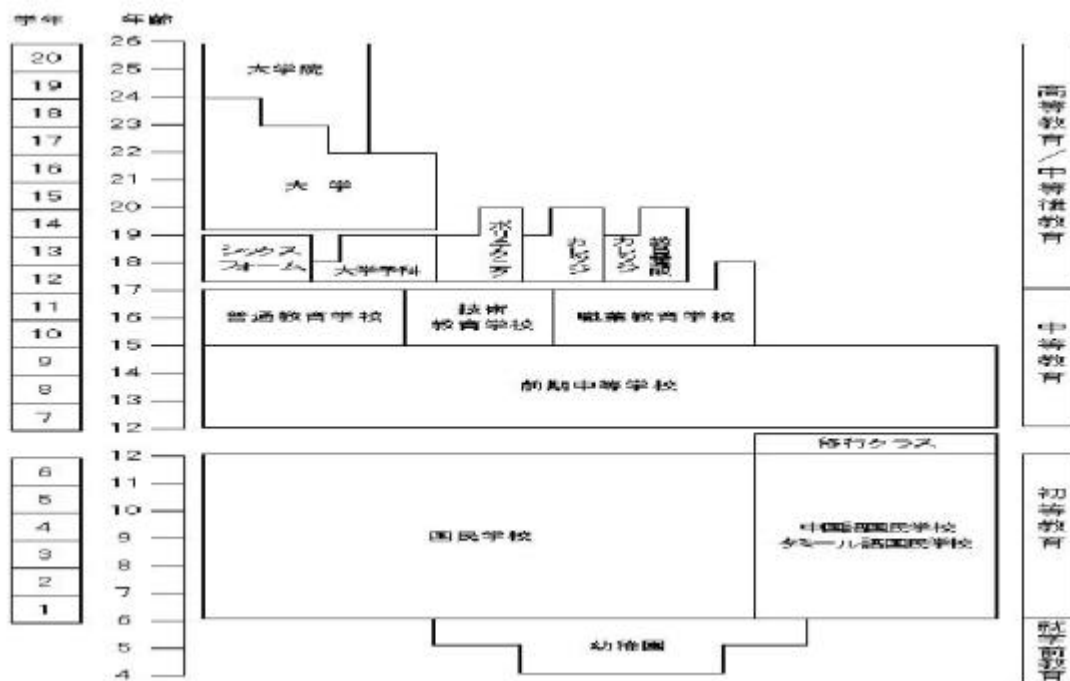
マレーシアの学校制度について

- ・義務教育の制度はない。ただし初等教育段階では該当年齢人口に占める在学者の比率はほぼ 100%です。
- ・2003 年度からは、理科・数学の英語による授業が実施され始めた。
- ・校舎の絶対的不足から、午前と午後の二部をとっている学校が多い。
- ・各学齢の終了時、全国統一試験があり、その結果が次年度のクラス分けにつながる。
- ・教育機関は使用する教授言語によって
マレー語の国民学校、
中国語の中国語国民学校、
インド系タミール語のタミール語国民学校、の 3 種類があります。

どのタイプの学校を選択するかは父母に任されています。

どの学校も教育時課程は共通で、マレー語を教授言語としない中国語国民学校、タミール語国民学校でもマレー語と英語は必修科目として教えられています。初等教育段階でもマレー語と英語が必修教科とされるなど、複数の言語を修得させる教育が特徴です。

(マレーシアの学校系統図)



クアラルンプール日本人学校概要

1 学校の概要 (平成14年5月1日現在)

(1) 教育目標

強いこころ 確かな学力 たくましい身体 豊かな国際性

(2) 施設設備

日本人学校の中でも世界屈指の規模と施設の充実
東西の運動場・体育館・プール、普通教室、特別教室、コンピュータ室等

(3) 園児・児童・生徒数

幼稚部 87名, 小学部 759名, 中学部 200名 合計 1,046名



2 教育の特色

(1) 国際理解教育の推進

国際交流会 (訪問と招待)

全ての学年が、それぞれ年に2度の現地校との交流を実施している。相手校を招待し、相手校を訪問するというパターンであるが、海外で生活していながら日本人同士で生活することがほとんどの子供達にとって貴重な機会となっている。これらの交渉と運営にあたっては、国際交流ディレクターの力が大きかった。



歓迎の様子 (現地校訪問)



カルタ遊び (招待)

【 3 学年の国際交流会 (招待) の計画 】

時間配分	交流活動の内容	留意点
8 : 15 8 : 50	スリKL校にバス到着	歓迎の垂れ幕準備
9 : 00	1 交流校日本人学校に到着 バスベイにて出迎え 体育館に誘導 2 開会式 歓迎のデモンストレーション 本校校長あいさつ 相手校児童あいさつ	
9 : 10	3 交流会その1 学校探検を通して学校紹介 日本文化資料室 日本茶を飲む プール・教室 教室では習字体験 バタフライパーク・PC室内	マレー語や英語での簡単な会話ができるようおやつタイムの形態を工夫する。
10 : 00	4 BREAK TIME グループ毎におやつ	
10 : 30	5 交流会その2 ふれあいゲーム 大縄跳び 相手校校長あいさつ	
11 : 20	6 閉会式 本校児童あいさつ 相手校校長あいさつ 7 交流会退場 バスベイ見送り	

国際性を培う「生活科・総合科」を中心とした授業実践とカリキュラム作り
「豊かな国際性を身につけた子ども」が研究テーマとしている。平成14年度は、
「生活科・総合科」を中心とした授業研究及びカリキュラム作りに取り組んだ。

【5年総合科年間カリキュラムの実際】

A (人権尊重) B (自己表現力) C (自国・他国文化理解) D (国際協力)

月	テーマ	単元名 活動内容 時間数	4 観点との関わり	関連する教科	
4	くらし発見 マレーシア	(1) ようこそマレーシアの友だち (20時間) 1 交流会などで使う自分の名刺づくりをする。 2 マレー語の簡単な日常英会話を学習する。 3 国際交流会招待のオリエンテーリング 4 交流会に向けてグループごとに計画立案、準備をする。 5 交流会を行う。 6 交流会をふりかえる。 7 ふりかえりカードで発表する。 意識調査(アンケート)の実施	A1 年間で交流することの期待を持ち取り組めるようにする。 C マレー語で簡単なあいさつができる。 B 友だちと協力して計画を立てたり準備する。	4月 国語 「友だちっていいな」 道徳 「ブラジルからきた転校生」 5月 理科 「季節と生き物」 特活 「友だちづくり」	
5		(2)くらし発見 マレーシア (30時間) 私たちが暮らしているマレーシアとふるさと日本について知っていること話し合い、両国のよさをもっと知るためにできることを話し合う。 (オリエンテーション)	C マレーシアと日本のよさを意識できる。	7月 音楽 「ラサヤン」 「ミッキーマウスマーチ」 E C (英会話) 「説明の仕方」 「サンキューカードづくり」	
6			A C いろいろな人とのふれあいを通してマレーシアの暮らしや人々の考え・思いへの理解を深める。	7月 音楽 「ラサヤン」 「ミッキーマウスマーチ」 E C (英会話) 「説明の仕方」 「サンキューカードづくり」 特活 「国際交流会に向けて」 10月 国語 「ローマ字」 理科 「季節と生き物」 特活 「ペスタスパンに向けて」	
7		マレーシア 1 身近なマレーシアの人へのインタビュー 2 マラヤ大学生との交流 3 国際交流会訪問 4 学んだことをまとめる。		相互理解	11月 社会 「私たちの県」 「土地の様子」 音楽 「もみじ」
9					ニッポン 1 ふるさと日本のよさ、好きなどころを話し合う 2 身近な人に日本のことをインタビュー 3 それぞれの地域の特色について調べる。
10		日本も見つめよう	意識調査(アンケート)の実施	A 社会科での学びや身近な人の話を通して、日本の暮らしや文化、風土などについて理解を深める。	12月 国語 「生活を見つめて」 社会 「私たちの県」 「シャーラム博物館見学」 音楽 「鶴の恩返し」
11			(3) 伝えよう マレーシア (18時間) 1 学習してきた中心事項を選ぶ 2 パソコンでまとめる。 3 総合で学んだことの発表会		
12					

カンポンホームステイ(カンポンとは故郷の意味)

対象は、小学部高学年と中学部の希望者で二泊三日で、農村部のマレー人家庭で寝食を共にする。高床式の家で、大家族の暮らし、マンディ(水浴び)、手で食べる風習など異文化をまさに実体験する。

(2) 情報教育の充実

校内には200台を超えるパソコンがあり、それらがLANで結ばれている。PCルームだけでなく、各教室からもインターネットに接続でき、授業で有効に活している。授業での活用が大変に積極的であり児童・生徒のPC活用能力も高い。大規模校にもかかわらず、職員室には一人の一台のPCが用意されており、文書のフォルダ管理がよくなされ、ペーパーレスでの職員会議を試行している。

【第6学年の情報教育年間指導計画の実際】

月	教科	単元(時数)	学習活動	具体的PC支援事項	技術支援	ソフト
4	社会	大昔の歴史	縄文・弥生時代の暮らしを調べる。	検索単語の入力の仕方(スペース・用語)		IE
5	体育	スポーツテスト	スポーツテストの結果集計とグラフ化	表計算ソフト(表作成・入力) グラフ作成の手順		HCW
6	国語	ガイドブックを作る	マレーシア・シンガポール情報を集める	検索方法の確認		IE
7	総合	個々の課題追求	個々の課題追求での調べ学習	IEの効果的な検索方法の指導	検索エンジンの活用	IE
	特活	国際交流会準備	名刺作り	一太郎スマイルの名刺機能の活用		IS
	国語	ガイドブック作り	修学旅行の情報を集めよう	IEによる情報収集の仕方 SNでのまとめ方 掲示板利用の交流	掲示板活用 返事の出し方	IE SN
9	総合	修学旅行のまとめ	調べたことをまとめよう。	SNでメモをまとめる。		SN
10	特活	国際交流会準備	名刺作り	ISの名刺機能活用		IS
	特活	交流会を終えて	交流会の感想・思いを書く	作文用紙の使い方	キーボード練習	IS
11	特活	ペスタスパン	ペスタスパンを振り返って	画面のレイアウトの仕方		IS
12	総合	個人のまとめ グループのまとめ	自分たちの思いを世界に発信しよう シンガポールの学校と交流しよう	ホームページの作成 ページレイアウト、ジャンプ機能活用、写真加工、貼り付け テレビ会議システムを用いた修学旅行報告会	ISの機能の活用	SN

SN(スタディーノート) MB(マルチブック) HCW(ハイパーキューブネットJR) IS(一太郎スマイル) IE(インターネットエクスプローラー)

(3) 在学児童への日本語教室

通学している児童を対象とした日本語教室が開設されている。外国での生活歴が長い。片親が外国籍などといった要因から、日本人でありながらも日本語の力が、十分でない児童が少なからず在籍している。教師と保護者側からの教室開設要望に基づき、14年度に開設した。実際に低学年の日本語指導にあたったが、教材準備や指導のノウハウに乏しく試行錯誤で指導にあたった。今後ますます国際化が進む中、日本人学校に学びながらも、一方で日本語の学習が必要となる児童が存続する予感がある。指導者体制の確立から、教材整備に追われる在外教育施設がクアラルンプール日本人学校だけにとどまらないように思われる。

この教室には、該当の児童だけでなく、外国籍をもつその子の母親や、時には父親が共に授業に参加することが多い。子どもと共に日本語を学んでいるのである。

(4) 英語教育の推進

週2時間の英語学習が小学部から中学部まである。現地スタッフが担当。

学年別週授業時数 (小学部)

		月	火	水	木	金	計
1年	全学期	5	5	5	4	5	24
2年	全学期	6	5	5	4	5	25
3年	全学期	6	6	5	5	5	27
4年	1学期	6	6	5	6	5	28
	2学期					6	29
	3学期					6	29
5年	1学期	6	6	5	6	5	28
	2学期					6	29
	3学期					6	29
6年	全学期	6	6	5	6	6	29

木曜日 6校時目 クラブ・委員会

英会話の学習

1年	EM 1時間	EC 1時間
2年	EM 1時間	EC 1時間
3年	EC 2時間	
4年	EC 2時間	
5年	EC 2時間	
6年	EC 2時間	

これらは左表の週時数内で実施している。

(総合的な時間より35時間
生活科より年間15時間)

EC ... 英会話

EM ... 英語の歌や遊び活動

(5) 世界最大の盆踊り大会(日本人会との連携)

7月には日本人会が中心となって、盛大な盆踊り大会が行われる。やぐらの上で中学部3年の男子生徒が太鼓をたたき、女子生徒及び、国際交流をしている現地校の中学生が踊る。そのやぐらの周りでは、現地の人々を中心に、実に四万人もの人出があり、盛大に踊る姿は圧巻である。この世界最大ともいえる盆踊り大会は、地域の名物として定着している。



呼び込み太鼓でいよいよスタート



熱気の中ステージで踊る中学生

4 本校の児童の素顔

(1) コンドミニアムからバス通学

セキュリティ面が最大理由で、日本人家庭のほとんどは、コンドミニアムで暮らす。日本の住居環境に比べ、広さだけでなく、プールや日本食品のあるミニマーケット付きなど設備面も快適である。登下校は、スクールバスを利用する。休日などは習い事が多いが、暑い天気の子供もおり、日本のように近所の公園で遊ぶことはなく、コンドミニアム内のプールや日本人同士の家庭内で遊んでいることが多い。

(2) 習い事の天国?

ピアノ、水泳やテニス等のスポーツ系レッスン、英語の個人レッスン、学習塾への通学など、学校の授業の他に、実に多くの学びをしている子どもたちが多く。一

人で4つ5つの習い事も珍しくない。中学部に部活はないが、バスケットボールや剣道の練習に放課後、打ち込む生徒がいる。また小学部にもバスケットボールサークルがある。学校とは別に、野球のリトルリーグ、サッカークラブ、柔道、剣道、少林寺など様々なスポーツ団体があり、活動している児童・生徒が少なくない。

(3) 暑さとの戦い屋外体育

教室や体育館はクーラーの効いた快適空間であるが、屋外での体育も行われる。スクール以外は、ほとんど一年中、太陽が輝くマレーシアでの屋外体育は、小学生の低学年にとっては、1時間が限度となる。とにかく暑い。それでも休み時間は、グラウンドで元気に遊ぶ姿は耐えない。現地の学校はクーラーの効かない教室も多くその点、恵まれた日本人学校の子どもたちなのである。



1年担任時の子どもたち(休み時間)

マレーシアのくらしから(異文化との出会い)

1 イスラム教の信者

(1) 一日五回の礼拝

一日五回の礼拝と金曜日の集合礼拝が義務づけられ、その後必ずメッカの方向に向かって礼拝を行う。(早朝夜明け前、正午すぎ、日没前、日没後、夜の五回)

各礼拝時間の前には、礼拝堂から祈りへ参加を呼びかける「アザーン」が、スピーカーから響き、毎朝このアザーンで目が覚めることが多かった。

テロ事件の影響によって、イスラムが好戦的な宗教だとか、非寛容な宗教だといった誤解が広がっている傾向があるが、果たしてどうだろうか。

もともと、イスラムは平和の価値を重視し、マレーシアをはじめ、ほとんどのイスラム国家は、今回のテロ事件を批判している。同時に、テロに対する報復攻撃によって、一般市民が被害にあうようなことも容認できないと主張している。底流にあるのは、「武力行使への自制」の立場なのである。

2 日本のお祭りを彷彿させるナイトマーケット

開催日が、地区により異なるが、KLでは周1回の割合で、ナイト・マーケットが開かれる。日本のお祭りの屋台が並んだ様子と同じで衣料品から、食料品、CDやDVD等なんでも出そろうのが実に楽しい。子どもだけの買い物は、さすがに不安だが、気楽に買い物や食事を楽しめる。おすすめは、何といっても南国のフルーツである。ここではマレーシアの食材にふれることができ、生活のにおいを感じた。



庶民が集うナイトマーケット

3 トドンを被ったマラソンランナー

イスラム教信者の女性は、トドンと呼ばれるスカーフを身につける。あの暑い国においては意外に思われるが、マラソン大会が各地で盛んである。この過酷なマラソン大会においてさえ、トドンを離さない。また長ズボン、半袖の身なりで走るのである。同じマレーシア人であるインド系、チャイニーズ系の人々の服装は、よく見かけるマラソンランナーのいでたちと同じであるだけに、尚更目立ってしまうのである。かわいそうにと言ったら、お叱りを受けるのかもしれない。

4 日本の情報は、NHKの国際衛星放送、その日の新聞

アストロテレビに加入すれば、日本の放送も楽しめる。朝刊を朝読むというわけにはいかないまでも、その日の午後には購入できる。ただし新聞は割高で、読みたくても我慢をすることが多い。

派遣教員としての生活から

1年目が1年生担任、2年目は6年生担任、3年目には教務担当、3年間の任務に力を注げるよう家族共々、日々の健康管理を大切にしてきた。海外生活のもと児童や家族の安全には注意を払うことが多かったが、周囲の人々にも恵まれた3年間だった。

1 自分自身の国際交流

現地との交流は活発に行ってきた。ボランティアとしては、日本語を学びたい現地の大人を対象とした日本語指導や、野球の普及を図る目的で発足したリトルリーグの活動には、コーチとして、また保護者として炎天下のもと毎週日曜日に汗を流した。また日本に留学希望のマラヤ大学生の受け入れ家庭として、日本の紹介をするなど協力させていただいた。妻も身障者施設等に定期的に出向くなど、精力的に活動を行った。

思い出深いのは、ルックイースト20周年記念パーティーで、日本芸能の紹介としてマハティール前首相の前で、よさこいソーランを職場の仲間と踊ったことである。少ない練習期間ではあったが、大きな拍手をいただきよき思い出の一つとなった。

また毎週金曜日の夕方、サッカーの交流試合があった。学校の現地採用スタッフとの交流ができると共に、多民族国家マレーシアらしく、マレー系チーム、インド系チームやチャイニーズ系、時にはジャーマンチームとの対戦など、様々なチームとの交流ができ、大変楽しいものであった。

児童とともに参加したカンポンホームステイ(マレーシアの農村部の家庭宿泊)では、なつかしい日本のふるさとを彷彿させる家族の生活がそこにあった。実にゆったりとした時間の流れを久しぶりに、このカンポンで味わった思いがした。



日本留学予定のマラヤ大学生受け入れ



毎週金曜日はサッカーの国際交流

2 英語は、やはり世界の共通語

英語は世界の共通語であるという言葉を目にするが、コミュニケーションをとる上で英語力の必要性を痛感した3年間でもあった。公用語は、マレー語であるが、実際の生活では、マレー語に加え、中国語や英語がとび交っているのが現実である。しかし彼らの多くは、英語で話すことができ、民族の違う人との会話においても困らない。

現地の人々にとっては、就職して生活していくためには、母国語に加え、英語が必要なのである。日本もコンピュータがそうであったように、英語も生活していく上でますます欠かせない力になっていくのだろう。

マレーシアの発展を願って

南国の美しい海そしてリゾート、田舎にいけば古きよき日本のふる里、近代化が急ピッチですすむ都市の三つの姿を持っているマレーシア。くったくのない笑顔、家族を大切に作るあたたかい心、多民族が共存して生活していく柔軟な心が、訪れる人々をフレンドリーに迎えてくれる。経済的には、2020年の先進国入りを目指している通り、マレーシアの近代化や経済発展を期待する一方で、精神的な面でのマレーシアのよさをいつまでも残してほしいと個人的に願っている。

紙面に書き尽くせないほどの貴重な体験、多くを学んだ3年間であった。このようなまたとない機会を与えて下さった方々に、そして海外生活を支えていただいたマレーシアの人々や仲間たちに感謝の気持ちでいっぱいである。

「トリマカシ(感謝)!!!」